～すべて戯言～

micky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～すべて戯言～

【Ｎコード】

Ｎ６２７４Ｂ

【作者名】

ｍｉｃｋｙ

【あらすじ】

坂田裕介がメインの話です。コナンに出てくる主な人物はほとんど登場せず彼一人の話です。私が書いているきえない翼の坂田なので、オリジナルな部分が多々あります。そんな話でもよかったら是非お読みください。

そして僕たちは出会った（前書き）

警告

コナンの主要人物はほとんど出てきません。

坂田メインの話です。

オリキャラが出ます。

以上踏まえた上で・・・ではどうぞ・・・。

そして僕たちは出会った

元大阪府警

坂田裕介死刑囚

殺人罪

彼女との出会いは運命・・・と言えばかっこよいがそんなものではなかった。

5年前。
僕が刑事課に配属されて3年目の夏。
豊中市で殺人事件があった。
大富豪を狙った強盗目的の殺人だった。

殺されていた大富豪の名は

青乃主　幸正（５２）
その妻
青乃主　雪絵（４７）
長男
青乃主　圭吾（２１）
の３名が深夜自宅で殺された。

家政婦が次の朝家を訪れるとその惨状に驚きすぐに警察へ連絡してきた。
防犯カメラが数名の犯人を捉えており、事件解決までさほど時間はかからなかった。
その家には当時もう一人
青乃主　玲祢（１７）
高校生の女の子がいた。

彼女は事件のあったその日は岡山の方へ部活の合宿に行って家を空けていた。
そして知らせを聞くと急いで岡山から戻り、変り果てた姿の家族と悲しい対面する事となった。

「いやや！お父さん！お母さん！お兄ちゃん！！」

家中にその声が響き渡り、胸が締め付けられる思いでいっぱいだった。
暫くすると彼女は壁にもたれ人形のように座り込んで、誰が話しかけてもピクリともせずにずっと下を向いていた。
無理もない。

幸せだった家族が簡単に壊されたのだから・・・。

先輩刑事が事情聴取に抜け殻のような彼女を無理やり連れて行こうとした。
彼女と一瞬目が合い、思わず彼女の細く白い腕を引っ張って
「僕が・・・聞いておきますから」
と言って自分の方へ引き寄せた。
その時、先輩から少し睨まれたけれど
「・・・・・じゃ任せるで。しっかり聞くんやぞ」
そういうとその場から離ていった。

「大丈夫か？」
何も反応がなかった彼女に僕の声が届いたようで、小さくコクンと頷いた。
「大変やったな・・・少しだけ・・・・・話聞かせてくれるか？」
すると彼女は消えそうな小さな声でポツリポツリと話してくれた。

合宿にいっていた事も確認が取れていた為、簡単に一通りの事を聞いた。

時々涙ぐみながらも一生懸命に答える彼女。
僕は小刻みに震えている華奢な肩に手を置き
「ありがとう・・・。もうええから・・・ごめんな」
彼女のそばを離れようとした時、僕の腕を彼女の白くしなやかな手がしっかりと掴んだ。
「えっ・・・？！」
「お願い・・・もう少しだけ・・・そばにいてください・・・」
僕を見上げるすがる様な瞳。

彼女の気持ちが痛いほど分かっていたからこそ、放っておくわけにはいかなかった。
「・・・分かった。もう少しだけな？」
掴まれた腕の手を握り締め、彼女の横に座り込んだ。

目の前では警察が慌しく動きまわっていたが、２人は黙ったまましばらくその光景を眺めていた。
「そろそろ・・・僕仕事に戻らんと・・・」
そう言って立ち上がろうとした瞬間、彼女がいきなり泣き顔を隠すように僕の胸の中に飛び込んできた。
「えっ・・・！あっ・・・の」
突然の行動に慌てふためきながらも、声を殺して泣く彼女に掛ける言葉がみつからず・・・・・・・
そっと包み込むようにただ・・・抱きしめた。

そんな彼女を最初は励ますつもりで仕事のヒマをみては会いに行き、いつの間にか一年がたっていた。

彼女もあの時と比べると笑顔を見せてくれるようになった。
公園で散歩して、近くのベンチで座って２人でジュースを飲んでいたら
「坂田さんて彼女いてるんですか？」
いきなりの質問に思わず、飲んでいたジュースを吐き出してしまった。
急いで彼女がハンカチを出して、背広についた部分を一生懸命ふき取ってくれた。

「ごめんなさい。変な事聞いたせいで」
「いや・・・かまわんよ。こんな忙しい刑事に出会いはそうないから。残念やけど恋の相談とかは乗ってあげられへんわ」
苦笑して答えると覗き込むようにこっちを向いて
「私・・・坂田さんにずっとそばにいてほしいと思っています。もし彼女とかおらんのなら・・・・・・・・・でも・・・嫌ですよね・・・家族が殺された娘なんて」
悲しそうに長い黒髪が風に揺れる。

多分・・・僕はわかっていた。

彼女を守りたいと思っているのは、ただの同情でもなんでもないことくらい。

その時、大滝ハンが近くで事件があったらしく偶然僕達とあった。
僕が頭を下げると
「近くで事件があったんやけどなんとか終わりそうや・・・今日は休みなんか？ええなぁ、こんなベッピンさんの彼女がおるなんて。今までどこに隠してたんや？」
と僕たちをみて笑いながら話かけてきた。

僕は決心して
「はい。・・・彼女の玲祢です」
驚いたように振り向いた彼女。
「え・・・ホンマに・・・」
次第に涙目になる彼女。
「泣かんといて・・・。・・・どういしていいかわからんようになる」

オドオドしている僕をみて泣きながら笑う彼女。

大滝ハンも困ったように僕たちをみていたが
「坂田。あんまり彼女泣かしたらあかんで。そんでまたゆっくり3人で会おうや」
そう言うと呼ばれている方へと戻って行った。

僕の不安な過去さえ忘れるほどの幸せだった。

それから4年が経った。

結婚も正直考えてはいたけど、昔の事を思い出すとなかなか言い出せなかった。

彼女はいつも
「祐ちゃんのそばにおれて幸せ」
そう言ってくれた。

僕も彼女といる時はいつも幸せだった。
忘れていた幸せを感じられた日々。

しかし

あの日・・・。

僕は逃走中だった沼淵を山小屋で見つけてしまった。

そして僕たちは出会った（後書き）

４話の話です。

ネタばれも含まれることもありますので、きえない翼に合わせての更新となります。

私が書いているきえない翼はこの話をもとに書いています。最初にこの話が出来てからあの話が浮かんだので・・・。なんとなく読んで欲しくて投稿しました。

あっ！そうだ！

きえない翼も宜しくお願いします（笑）

真実に離される心（前書き）

注意は１話同様です。

真実に離される心

それから玲祢と会うことはほとんどなくなった。
何度も電話をくれたが「忙しいから」と一方的に断っていた。

もう会うわけにはいかなかった。

だけど・・・「別れる」とも言えなかった。

彼女の存在は僕を唯一この世界に留めてくれる大切なものだったから。

もし会えば僕は使命を果たせなくなる。
ずるいかもしれないが・・・その時平常心を保ちながら生活するには彼女が必要だった。
この使命を果たせた時に「別れ」を告げようと思っていたんだ。

当時8歳だった僕。

父は兵庫県の小さい教習所で教官をやっていた。
とても厳しい父と少し病弱だが、とても優しい母と3人で暮らしていた。

普通の家庭の普通の暮らし。
それでも十分幸せだった。

「いってくる」
父のいつもの言葉。
僕は寝坊してしまい台所で急いで朝ごはんを食べていた。
この日に限って玄関まで行って
「行ってらっしゃい」
といって送ってあげられなかった。
母は玄関で父を見送ると僕のそばにきて
「明日から寝坊せずちゃんと起きなあかんよ。お父ちゃんがもし今度見送りできないようなら二度とドライブには連れていかんぞって言うてたよ」
僕の頭を撫でながら笑顔で母は言った。
「そんなんいやや！明日からきちんと起きるから連れてっててオトンに言うといてや」
父はいつも帰りが遅いため、僕が眠ってから帰ってくるのが当たり前になっていた。
そんな父が家族孝行の為、いろんな所へドライブに連れていってくれていた。
それがなにより楽しみだった僕は明日からは寝坊はせずきちんと起きようと心に決めた。

夕方。
いつものように学校から帰って、「ただいま！」と言って玄関を開けると知らない靴が沢山あった。

妙な胸騒ぎがした。

「ただいま～オカン！・・・どこにおるんやろ？」

いつも父が寝ている布団の横に座っている母の姿をみつけた。

「オカン・・・なんか人が仰山おるけど何で・・・」

母は正座したまま布団で眠っている父の横で動かなかった。

「オトンどないしたん・・・。なんで家におんの？」

父のそばに行くとひどい火傷の痕があり思わず後ろに下がってしまった。

「お父ちゃん・・・教習所で事故におうてな・・・火傷もひどくてなぁ・・・」

そういうと母は父の火傷をおった手を擦りはじめた。

「もう・・・声も聞かれへんし・・・もう・・・笑った顔もみられへん」

母が何を言いたいのか分からなかったが

「お父ちゃん・・・・・・死んでしもうた。・・・朝あんなに元気やったのに・・・なぁなんで？・・・なんでこの人が死ななあかんの！」

母の涙を初めてみた。

僕は何故か泣いてはいけない様な気がして、そんな母の背中をゆっくりと擦ってあげる事しかできなかった。

訃報を聞きつけて家には親族達や父の知人でごった返していた。

その中の一部の大人たちは楽しい話でもするかのように

「仕事中に飲酒運転やて」

「車の指導する人がなぁ・・・」

その声は母にも僕の耳にも聞こえてきた。
僕はそいつらの所に行き
「オトンはそんな事絶対にせいへん！勝手な事言うな！」
近くにあった座布団を投げつけてた。
「なにさらすねん！このガキ！」
その中の一人が僕の方へやってきて襟をつかんだ。

その時母がスッと立ち上がり
「・・・・・・お帰りください」
「はぁ？！」
「帰ってくださいと言うたんです。この子の言うとおりあの人はそんなんする人じゃありません。お願いします・・・・・・お帰り下さい」
そういってその人たちの前で正座して頭を下げた。
僕も母の横に座り頭を下げた。

静かになった家の中に2人きりで、いつまでも父の横に座っていた。

警察が調べた結果は父の体内からアルコールが検出された事から、それが決め手で酒を飲んで運転し誤って車を操作した末の事故という事で片付けられた。
僕は歯を食いしばってその説明を聞いていた。
（こいつ等何も分かってない！オトンは仕事中に酒なんか飲まへん！）

そんな中、引き上げていく刑事の中に一人だけ僕に
「ごめんな・・・なんも力になられへんで」
悔しそうな表情みせた人がいた。
その人と出会うのはそれから１２年後になる。

真実は別にある。
そう・・・もしかしたら事件なのかもしれない。
幼いながらにそう直感した。

父の真相を確かめたい。
そして父の敵を取りたいと思う一心で必死で勉強し警察学校にも入った。

そして母は・・・父が死んでからしばらくして徐々に心のバランスが崩れ始め精神科の病院に入院する事となった。
なにより優しい母は世間の目には耐え切れるほど強くなかったのだろう。

母が病院で自殺をした。

僕は涙を流さない代わりに強く心に誓った。

「犯人は絶対にいるはずや。必ず真実を突き止めるから・・・そや

からゆっくり休んでな」
母の墓前に花を添えて僕は2度とその場に行く事はなかった。

母方の親族に引き取られ、名前も「稲葉裕介」から「坂田裕介」になった。

そしてなんとか大阪府警に入った。
「仕事に誇りを持て」そういった父の言葉胸に警察官としても精一杯頑張ってきた。

そして・・・沼淵に会ってしまった。

しかし僕は知ってしまった真実は・・・。

その真実は・・・さらなる真実を隠していた事を知った今は・・・。

僕を動かすには十分な動機だった。

真実に離される心（後書き）

きえない翼只今執筆中です。

この話は全部出来ているのですが、今回で一旦止まります。

きえない翼が進んで行く上での更新となります。

勝手なお話を温かく読んで頂いている読者の方・・・。

ありがとうございます。

坂田のその後はまた更新時に・・・では。

そして赤く染まる（前書き）

注意は1話と一緒です。

そして赤く染まる

沼淵を山小屋に隠して僕はいつもの生活をしていた。
僕がターゲットにしたのは6人。
その中にもちろん沼淵も含まれているが、こいつは最後に殺すつもりだった。

長尾英敏（コンビニ店長）
西口多代（居酒屋の女将）
野安和人（タクシー運転手）
岡崎澄江（主婦）
郷司宗太郎（府議会議員）
沼淵己一郎（無職）

準備は出来た。
あとは時を待った。

僕の心は不思議と静かだった。
来るべき時がきたんだ。
法では裁く事の出来ない罪を、最後僕の命と引き換えに奴らを裁く。
なにが正義かなんてどうでもよかった。

どうせこの手は赤く染まる運命なんだ。
なら彼女の為に染まりたい。

沼淵は暇つぶしがてら僕に昔の話した。
その中に5年前に大阪豊中の大富豪殺人があった。

僕の頭の中に玲祢の顔が横切った。
「あれは大変だったぜ。今じゃ府議会議員なんてやってるがアイツに頼まれて強盗に見せかけて殺しに行ったんだ。その時の対抗馬のスポンサーが青乃・・・なんだっけかな。そいつを殺せば報酬くれるって言うからよ。アイツが用意してくれた仲間と夜中に忍び込んで確か3人殺った。本当は4人依頼されていたんだがどこ探しても一人いなくてよ。しょうがねーから3人だけ殺した・・・・・ヒヒヒ・・・俺はもう何十人も殺してるからよく覚えちゃいねえがな・・・他にも・・・」
自慢げに話ている奴の顔面を、僕は思いっきり殴ったんだ。

何度も・・・何度も・・・。

気がつくと僕も沼淵も血だらけだった。

「痛え・・・なんで殴るんだよ!飯・・・なぁ・・・早く飯をくれよ。俺腹が減ってるんだよ」
奴を置いたまま山小屋を出た。
「おい!飯!飯を置いていけよ!」
叫んでいるがこれ以上そばにはいたくなかった。
そして心の中の殺意が揺るがないものになった。

東尻署に戻る車の中で携帯が鳴った。
玲祢からだった。
『祐ちゃん・・・仕事中?』
その声に・・・僕の流さないと決めていたはずの涙が溢れてきた。
『祐ちゃん?どうしたの?』

僕は平静を装いながら
「なんでもないんや。ちょっと仕事が忙しくて・・・玲祢こそどないしたんや？」
『・・・ううん。なんでもない。祐ちゃんの声が聞きたくて』
「・・・僕も。なんか玲祢の声聞きたかったから・・・ありがとう・・・ホンマにありがとう」
涙で前が見えなくなって、車を路肩に寄せて停まった。
『大丈夫？あんま無理せんといてね』
彼女は何も知らない。
知る必要もない。
今さら昔の事を告げて彼女の笑顔を奪う事はしたくない。

どうか・・・いつまでも綺麗な君のままで。

「玲祢・・・ごめんな」
『なにが？』
「・・・ホンマにごめん。もう電話きるわ」
『忙しいん？』
「・・・・・・うん」
『体に気をつけてね・・・』
「玲祢も・・・体には気をつけてな」
『・・・うん』

僕達は電話をきった。

そしてこれを最後にしようと思った。

そしてそれから2日後・・・僕の手は赤色に染まった。

そして赤く染まる（後書き）

残りあと1話です。

次回は本当に少しだけ平次がでます（期待しないでくださいね…本当にちょい役なので）

あっ！

きえない翼も明日更新予定です。こちらも宜しくお願いします（'◇'）ゞ

愛してくれた君に望むこと

意外と僕の心は落ち着いていた。

人を殺したのに・・・。

もう・・・元には戻れない・・・。

それでも僕は顔を空に向け、眩しい太陽の光を浴び歩き出した。

そして帰りのパトカーの中で僕の携帯へ平次君から電話があった。
彼は上司ご子息。
頭のきれる子で、それでいて人懐っこく自分の事も慕ってくれていた。

どうやら今回彼の知人の毛利小五郎さん達が大阪に遊びに来るらしく、僕はその運転手として頼まれた。
いわゆる接待役だ。

パトカーを大阪案内に使っていい…などと、本部長とその息子さんはホンマに職権乱用したい放題やなぁなんて思いつつ僕は快く承諾した。

『あっ！坂田ハン？この前言うてた件の事やけど…』
「・・・！。あぁ、東京の名探偵の毛利小五郎さん達が観光に来はる言うてたやつの事ですか？」
『そやそや。オヤジが許可してくれたから、東尻で一番ええやつで頼むで！』
「平次君の頼みや。任しといて下さい！」
『これで段取りは揃ったわ。坂田ハンは運転上手いし、安心して大阪観光させてやれるちゅーわけや。工藤…じゃない。毛利ハンもきっと喜ぶこと間違いなしやな。ハハハハハ』
「確かにパトカーで案内されるなんて知ったら、ビックリされますね」
『俺はその顔が見たくてオヤジに頼んだんや』
「ハハ。平次君らしい・・・あっと僕ちょっと今から用事があるんで失礼します」
『そんなら当日通天閣で！』

多分僕が運転好きの事を、本部長は平次君から聞いたんやろな。
彼が何故僕を慕ってくれていたのかはわからなかった。
正直、育ちが違う彼には最初僕の目には道楽息子にしか見えなかった。

それでも平次君が事件を解決する度に…犯人を追い詰める時の真剣な眼差しを見る度に僕の心は揺らいでいた。
すべてを見透かすような瞳で、時々犯人をみるんだ。

まるで彼が僕の心を見られているようで。

そしてその瞳で、僕の罪を彼がいつか裁いてくれるような気がして・・・。

ごめんな平次君。

君には嫌な思いをさせてしまって。

君が通天閣で言った

「人間なんかいつ死ぬか分からない」

その言葉を聞いた時、それは誰に言ったのかはわからないが僕は一瞬声をかけ損ねてしまった。

オトンとオカン・・・そして玲祢の顔が頭を過ぎった。

でも僕は止まれなかった。

自分でももうどうする事も出来ない。

1人殺すのも何人殺すのも一緒だ。

僕は僕の正義の為に人を殺す。

平次君。

僕は君の目の前で殺人を繰り返す。

もしかしたら君に止めて欲しいのか・・・それとも見届けてほしいのかったのかは今になっても分からない。

そして僕の心で望んでいた事が現実となった。

そのすぐ後に警察病院に運ばれた時、僕は玲祢に別れを告げた。

ー大阪拘置所ー

判決が決まってからも玲祢はいつもの様な…僕の好きな笑顔で会いに来てくれた。

最初は「来んでくれ…頼む」と何度も頼んだが頷いてはくれなかった。

会いに来てくれた時、面会も拒否していた。

彼女の為だから…と心を切り裂かれる思いで1人で帰らせた事もあった。

それでも…彼女はやってきた。

今更…甘い恋を語ることはなかった。

彼女は毎日飽きもせずに、僕の話を聞いていた。

話の内容は…ほとんど僕が警官になってからの話ばかり。

その中でも彼女は平次君の活躍するする話が好きなようで、少女のような瞳で聞いていた。

でも平次君とはそれからは会っていない事を話した時に

「裕ちゃんは…平次君に会いたいんやね。今度お願いして一緒に面会に…」

「アカン！」

僕が大声を出してしまい玲祢はビックリした顔で僕をみていた。

「ごめん。玲祢…それだけはアカン。平次君から来てくれるなら嬉しいけど、人に勧められて来てもらってもお互いなにも話せないに決まってる。そこには罪悪感だけで何もないんや。彼にはホンマに

感謝してるし、会いたいのはやまやまやけど…。わかるか？」
玲祢は頭を横に振った。
「だって裕ちゃん…平次君に会いたいん言うてるやん！なんでそんなに意地を張るん。アタシには分からへん」」
「意地とはちょっと違うんや。彼には僕の事でかなり辛い思いをさせてしまったんや。ホンマによう慕っててくれてたちゅうのに…それを裏切ってしまったんは僕や。許してもらおうとかは思わへんけど……もしも…平次君から来る気になってくれたら…そしたら思い残す事はもうない」
その時…玲祢の顔からは笑顔が消えた。
「裕ちゃん…知って…」

「えっ？」

「ううん。なんでもない」
またいつもの笑顔に戻った。
一瞬消えた笑顔に不安が横切った。
（玲祢は僕が死刑になることを知っているんか。そんな遠い日ではない事を…）
「玲祢…もしも僕が死んだら…」
その時面会時間が終わってしまった。

そのから玲祢は面会に来なくなった。

僕はある男性から自分の死刑の日を聞いていた。

彼女にも誰かが言ったのか？

神様

どうか彼女がいつまでも笑顔でいられますように・・・。

明日は僕の最後の日…。

玲祢…。

平次君に会えた事を話したかった。

そして君にきちんとお別れがいえない事が残念でしかたない。

だから君の笑顔がきえないように

僕の命が尽きたあとも…それだけを願う。

「遅くにすいません。この手紙をお願いします」

こんな僕を愛してくれた君へ…。

君にこれだけは伝えたいことを書いて送るから。

無事に想いが彼女に届きますように…。

そして読んだら捨ててくれ。

消えゆく人間の戯言だと…。

愛してくれた君に望むこと（後書き）

消えない翼のサイドストーリーでした。

こんな主役の話をここまで読んでいただいた読者の皆様。

駄文ながらもお付き合い下さいまして本当にありがとうございました。

たった４話ですが、実際この話を書いた当初は短編でした。

では…私の戯言も終わらせて頂きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6274b/

～すべて戯言～

2010年10月28日05時32分発行